

# ことばと人間、ことばと文化に関する試論<sup>1</sup>

小 川 暁 夫

## 1. はじめに

『国際文化学』第2号において宇津木成介氏は、「差異から始まる文化論試論」と題して文化における「差異の検出」と「共通性の認識」という2つのメカニズムを論じている。本稿は、その論考にあやかっただけのものであるが、問題の出発点を「文化」そのものではなくて、「ことば」に置いて、その2つのメカニズムを検討したいと思う。「ことば」からそこに多少なりとも反映していると考えられる「文化」にいかにも迫れるかという素朴な（そしてナイーブであることを承知の）疑問に対して、満足できる解答には至らなくとも、考えるための契機を見出すことができれば、この小論の目的は達せられたことになる。

宇津木氏は、「異文化を認識させる契機としての異なった」諸現象のうち「容易に見えるもの」として言語を挙げている（p. 9）。しかし、実際は言語の差異を「正しく見る」ことは簡単ではない。容易に見える言語事実であっても、一見差異であるようなものが本質的には同じ原理によって統御されていたり、またその逆に、外見上似たようなものでもその根本は別のところにあったりする。本稿では、まず、ことばの差異と共通性を従来の議論と合わせて具体例で示す（第2章）。次に、そこには人間および文化との関わり方においていくつかのレベルがあることを論じる（第3章）。最後に、個

---

<sup>1</sup> 本稿は神戸大学国際文化学会『国際文化学』（2000）第3号、pp.1-12に掲載された論文「ことばの差異から始まる文化論試論」に軽微な変更を加えたものである。

別言語における差異が一方で「個別文化」の特質と関わっていながら、それらは他方で人間言語の「共通性」の具体的な顕在化に過ぎないことを、言語事実に基づいて主張したい（第4章）。

本稿のさらなる意図は、ことばについて考えることから、その主体的な使用者である人間やそれが埋め込まれた文化について考えることにつながる、その方向性を示すことにある。そこでは、ことばとインターフェイスする数々の領域との学際的な共同研究の可能性を示唆すると同時に、そこを横断する「国際文化学」とは何であるか、という私自身にとっても明確な答えのない問いに対する1つの切り口を見出したいと思う。

## 2. ことばの差異と共通性

言語の差異を見つけるのはやさしい。ソシュールの「恣意性」を持ち出すまでもなく、原則として（音声）形式と意味（内容）の結びつき方は言語間で異なるのであるから、それは当然である。

私たちが母国語以外の言語と接する時、まず最初に目を引くのは、語彙レベルでの差異である。これには、いわゆる「言語相対性」の名の下、多種多様な事例が挙げられ、論じられてきた<sup>2</sup>。色彩語であるとか、雨、雪、草木、食物などの名称の差異や細分性に関するものがその代表である。またこれらは、多くの場合、ことばの背後にある「文化」のコンテキストと共に語られてきた。そこでは、イヌイト（エスキモー）が多くの雪の名称を持つことと、彼らの生活形態との密接度や、場合によっては「思考」との関連で、認識プロセスの容易度とのつながりさえも示唆された。

このような議論は、確かに興味深いテーマを提供しているのだが、それだけでは皮相的な観察に止まってしまう恐れがある。また、議論自体の発展性も見えにくいように思われる。他方で、「言語相対性」はその極端な形として、個別言語が「一民族最高の文化財」であり、そしてまた「社会の認識様

---

<sup>2</sup> 20世紀前半にドイツを中心に発展した「意味野の理論 Wortfeldtheorie」はその成果の1つである。

式」として人間と現実世界に介在する「言語的中間世界」であると位置付けた (Weisgerber 1929)。これは、簡略化を恐れず言えば、言語の差異は文化の差異、ひいては思考の差異に他ならないとする主張である。しかし、この主張は、たとえその是非論を不問に付したとしても、追体験するのは簡単ではない。

言語間の差異は歴然としかも大量に存在する。そこで私たちが考えねばならないのは、むしろ、これらの差異がいかに説明できるのかである。差異はもともと差異として存在しているのか、それともそれは何らかの共通性を基盤として初めて成立しているのか。そもそも差異を差異として認識するためには、共通性が不可欠でないのか。あるいは、言語における共通性・普遍性が存在するとすれば、それは一体どのような性質のものなのか。これらの問いに答えることで初めて、ことばと文化やことばと思考の関係を論じることができると思われる。

言語の差異を考える時、地理的な類似性を持ち込むことは可能である。確かに、地理的に近い言語同士は多くの共通点を示すことが多いし、遠い言語間では (一見) そうとは限らない<sup>3</sup>。それは、音声対応に始まり形態、語彙、文法カテゴリーを経て構文、テキスト構成、談話パターンに至るまで様々なレベルで観察できる<sup>4</sup>。その意味で、「西欧の各文化はそれぞれ異質であるが、アジア文化の文脈からすると相互に良く似ており、かつアジア的文化とは全く異なった諸点を持つ (宇津木 2000 : 11)」という一般化は、その「文化」を「言語」に置き換えてもかなりの程度妥当する。しかし他方で、ヨーロッパの言語とアジアの言語を仔細に見てみると、あるヨーロッパ言語が別のヨーロッパ言語よりもアジア言語に似ている特徴を示したり、逆に、あるアジア言語が別のアジア言語よりもヨーロッパ言語に似ている特徴を示す場

---

<sup>3</sup> ロマンズ語に属するルーマニア語がスラヴ・バルカン語圏に位置することで、他のロマンス諸語にないスラヴ・バルカン諸語の特徴 (例えば、定冠詞の後置) を有することは示唆的である。

<sup>4</sup> ヨーロッパ科学基金の支援による大規模な言語類型論プロジェクト (EUROTYP) の成果はそれを詳細かつ体系的に示している。König (1995-) 参照。

合が少なからずある。例えば、対格、与格、属格などの格体系においては、ロシア語は同じスラヴ語派のチェコ語より日本語と類似性を持つ。動作が対象に間接的あるいは否定的にしか及ばない場合、ロシア語では対格目的語ではなくいわゆる属格目的語が現れるが、それは日本語において「のこと」など「所有格つまり属格+形式名詞」に少なくとも部分的に対応する（私は傘（\*のこと）を会社に忘れた vs. 私はあの日（のこと）を決して忘れない／私は山田さんをよく知っている vs. 私は山田さん?（のこと）をよく知らない）。他方チェコ語では、属格目的語はほとんど衰退して現在に至っている。また、能動態、受動態、使役態などのヴォイス体系においては、韓国語は日本語よりも英語と類似性を持つ。例えば、Chelswu-ka Yenghuy-eykey meli-lul kkakk-i-ess-ta は、John has the hairs cut by Mary と同様、「チョルスがヨンヒに自分（つまりチョルス）の髪を切られた」の意味しか持ちえないが、日本語の「太郎は花子に髪を切られた」は、「太郎が花子に自分の髪を切られた」の他に「太郎が花子に花子の髪を切られた」の解釈も許す。このように言語においては、地理的接性、系統・語属を超えたレベルでも多くの共通性を見出すことが可能である。それは、ヨーロッパ言語、アジア言語に限定されず、世界の全ての言語に関して議論することができるのである。しかも、それらの共通性の検出は、一方で共時、通時の枠を取り外して目指すべきであり、他方では方言や地域語のレベルをも包括して問題とされねばならない。例えば、中世ドイツ語における「主語」は、現代ドイツ語よりもむしろ現代日本語のそれと共通の特性を持つ。中世ドイツ語と現代日本語には、現代ドイツ語と異なり、「与格主語」の存在が十分に認められるからである<sup>5</sup>。また、福岡方言においてはダイクシス動詞「行く／来る」の相補分布が標準（？）日本語よりもむしろ標準（？）英語と似ている。福岡方言では「すぐ来るけんね。待って。」のように、話し手がそこにいなくても、聞き手など話し手にとって「共感度 empathy」（久野 1978）の高い場

<sup>5</sup> 詳しい議論は、Keenan (1976)、柴谷 (1985)、Ogino (1997) を参照。

所への移動に「来る」を使える点が英語と同一である (I'm coming soon)。

このように比較の対象は多岐にわたり、言語の差異と共通性をめぐる仮説の提示、その検証あるいは反証は広い裾野で展開することができるのである。

### 3. 差異と共通性のレベル

ことばの差異と共通性を考える場合、そこにはいくつかのレベルがあると思われる。それは、ことばをその主体的使用者である人間やそれが埋め込まれた文化といかなる関係において位置付けるかによって異なる。

第一のレベルは、ことばを人間に共通した、生得的に与えられた統合体と見なす立場である。生成文法理論に代表されるこの考えによれば、人間の言語能力は遺伝子的に予め組み込まれたプログラムであり、個々の言語の習得はその発現のプロセスに過ぎないことになる。それは、人間が生まれながらにして歩行能力を持ち、ことさら外部から教示されなくても、歩けるようになるのと変わるところがない。とすれば、人間の歩行が一律であるのと同程度に、言語間の差異は僅かなものということになる。もちろん、個別言語間の差異は見かけ上、大きい(と思われる)場合がある。そこでは、パラメータという概念が重要である。パラメータの種類とその可能な値は限定されているが、パラメータ同士は運動関係にあるとされる。つまり、あるパラメータ A が極端には差がない  $x$ 、 $y$ 、 $z$  という 3 つの値しかもたないとしても、それによりパラメータ B、パラメータ C 等の値が自動的に異なって設定されるならば、最終的に出来上がった結果、つまり習得された個別言語は、少なくとも外見上お互い相当に違った姿を見せることになる。

第二のレベルは、ことばをそれ自体で完結した「有機体」として捉える場合である。この考えは、いわゆる古典的類型論からの脱却を目指したガベレンツが言語を植物に見立てて言明している。「ある言語に向かって次のように言うことができるとすれば、何という功績であろうか。おまえはこれこれしかじかの個別的特徴をもっている。したがって、これこれしかじかの別の

特徴をもっているはずである。結果、おまえの全体的特徴はこれこれしかじかとなるろう。きっと果敢な植物学者が菩提樹の葉から菩提樹の樹を再構成しようとしたのと同じように。(Gabelentz 1891: 481 日本語訳筆者)」ここには、明らかに個別言語イコール有機的統合体とする考えが根底にある。同様に、現代の言語類型論の創始者とも言えるグリーンバーグ (1974) も、個別言語を「統合的な形態 integrated configuration」として特徴づける試みの中で、「個別言語志向的な類型論 individualizing typology」を主唱している。ここで中心となる問いは、言語の構造と機能がいかなる相関関係にあり、またそれらがいかに類型化されるかである (小川 2000、Ogawa 2000)。そこでは、言語間に見られる類似性や多様性はとりあえず議論されない。構造と機能の首尾一貫した関係は個別言語内部の問題だからである<sup>6</sup>。個別言語は、それを使う人間と、それが使われる文化と不可分に存在している。とりわけ、ことばの機能について語る場合、その使用者や使用環境がそれを強く規定するのは明らかであろう。必然的に、そういった機能を担う構造自体も、それに適合して形成されてくるはずである。第一のレベルでの統合体としてのことばが、人間の持つ生得的言語能力として、使用者を含めた広義の外部環境 (これには当然、文化も含まれる) からいわば隔絶した自律的メカニズムであるとすれば、第二のレベルでのそれは、一つの言語共同体に共有され、個別言語として自己完結して機能する記号構造体系であると言える。それは、ソシュールの言う「ラング」に最も近いものであろう。

第三のレベルは、より広く「文化」を取り込んだ言語観である。それは、ウォーフ (1956) の言う、各言語における「好まれる言い回し fashions of speaking」に代表される。文化が言語表現に投影していると仮定する限り、それらをお互い切り離して特徴付けることは困難である。これは、「文化記号論 cultural semiotics」において前提とされている主張でもある。個別言語がその構造と機能においてその内部で自己完結していると考える第二のレ

<sup>6</sup> 例えば、なぜフランス語の再帰構文が純粹に受動的用法を持つのにドイツ語ではそうではないのかなど、個別言語における構造と機能の関係についてである。

ベルと違い、ここでは個別言語の特徴と個別文化の特徴が直接的に重ね合わされる。異言語に見られない特性が際立てられ、個別「言語文化」の独自性に焦点が当てられる。第一のレベル、つまり遺伝子的にプログラムされた能力システムとしての言語が人間に身体的に内在しているのに対して、第三のレベルの言語は、(第一のレベルでいう)人間に外在し、文化に不可分に織り込まれ、規定されている。この点を第二のレベルについて見れば、言語は人間からも文化からも離れ、特定の言語共同体により共有されながら、一種抽象化された体系として存在している。

以上3つのレベルを具体例で示そうと思う。それは、受動態をめぐってである。まず第一のレベルにおいては、私たちが通称「受動態」と呼んでいるものの自立的存在すら疑われている。つまり、それさえもが複数のパラメータの値設定により生まれた随伴現象 (ephiphenomenon) であると考えられるのである。「受動態」とは便宜的なラベル付けに過ぎない。そこには、受動態固有の「機能」(レベル2) やそれを外側から規定する「文化」的背景 (レベル3) の入り込む余地はない。一方、第二のレベルでは、受動態の形式と機能の関係が問題とされ、それはとりわけ同一の「知的意味」を持つとされる能動態との比較においてなされる。そこでは当然、言語形式による外界の事態の捉え方の違いが議論される。そこには、しかし、「文化」との関連はない。むしろ、いわゆる機能的普遍性 (functional universals) として「受動態は動作主を非焦点化する」といった一般化がなされる。なお、受動態の機能としては、他にも「被動作主を焦点化する」が想定できるが、これはラテン語などの歴史的言語からドイツ語、オランダ語、アイスランド語、ウェールズ語などの現代諸語にわたり広範に見られる非人称受動 (impersonal passive)、つまり被動作主の現れない受動態の存在により、言語普遍的とは言えない。そして第三のレベルにおいては、受動態のより個別言語的特徴が際立てられ、それが同様に個別的な文化の在り方との関連で論じられる。例えば日本語のいわゆる被害受身文 (「私は帰り道で雨に降られた」) は、事態を日本語・日本文化特有の仕方で「捉える」表現形式と見な

され、被害受身文を持たない、あるいは多用しない言語などとは区別される（例えば英語）<sup>7</sup>。その「捉え方」は、日本語・日本文化の基底をなす心的（精神的）態度に結び付き、他言語・他国文化におけるそれと区別される。言語における表現タイプとそれを用いる人間の文化タイプが、同列とはいかなくとも、不可分な関係のうちに語られることになる（池上 1983 参照）。

以上3つのレベルは、お互いがお互いを排除するものではない。日本語の被害受身文は、言語内在的なパラメータに統御されていると予想されるし（レベル1）、また同時に通言語的（cross-linguistic）な機能的普遍性が妥当する一例とも言える（レベル2）。と同時に、それは（日本）文化との関わりでも相応に特徴付けできることも確かである（レベル3）。事実はむしろ、それぞれのレベルが相互にインターフェイスを形成していると考えられる。人間を内側から規定するものと外側から規定するものの合流である。単一のレベルだけで事柄を論じ尽くすことはできないし、逆に、レベルの相違をなし崩しにして言語一般について述べることも不可能である。

また、言語に関するこれらの諸レベルは、それぞれ他の対象領域へのさらに広範なインターフェイスを築いていかなければならないと思われる。それは、一方でより人間身体志向のパラダイム（例えば脳生理学、遺伝学、心理学）、他方でより文化社会志向のパラダイム（例えば広義の文学、人類学、社会学、歴史学）との共同作業の必要性を意味する<sup>8</sup>。

---

7 日本語では特に話し手の立場から事態を述べる場合に被害受身文が多用される。「私は帰りの電車で足を踏まれた」は「帰りの電車で誰かが私の足を踏んだ」(Someone stepped on my foot in the train home) ではほとんど言い換えが不可能である。

8 例えば、1992年に創設された「マックスプランク進化人類学研究所 Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology」（ドイツ・ライプチヒ）は、「霊長類学」、「言語学」、「進化遺伝学」、「発達・比較心理学」の4部門から成る、学際的な研究機関である。



#### 4. ことばの差異と文化の差異—その連動性と共通基盤

ここで、前章における第三のレベル、つまり文化に不可分に織り込まれ、それを色濃く反映するものとしてのことばについて少し詳しく考えたいと思う。

池上（1983）は、英語と日本語の様々な表現タイプの比較を通じて、英語では「動作主」や「被動作主」などを前景化した「行為」中心の表現が優勢であり、日本語ではそれらを背景化した「出来事」中心の表現が優勢であると指摘している。また、英語が行為に参加する登場人物を「個」として際立たせる傾向が強いのに対して、日本語はそのような「個」を出来事の中に埋没させて事柄を描写する傾向が強いとも述べている。さらには、英語が「動的」表現を用いる場面で日本語は「静的」表現を用いることが多いが、その逆は成り立たない、という主張もなされている。言語の「形式」的差異と「文化」的差異の関係は、池上自身も述べているように、古くから多くの研究者によって、言い方こそ変われ、繰り返し指摘されてきた（池上 1983: プロローグ）。

このような議論は、一見すると言語と文化の多元主義を強調しているように見える。少なくとも、「言語普遍性」よりも「言語相対性」に力点が個かれて、論が展開されていることは疑いがない。しかし、ここでもやはり、人間言語に共通した生得的プログラム（レベル1）や有機体としての言語における言語普遍性（レベル2）と平行して、言語と文化をつなぐ共通の基盤が確保されていなければならないと考えられる。それは、人間の精神活動に通底する認知的基盤とも呼べるものである。この点については、後でまた立ち戻る。

さて、「行為」中心の表現は、それに参与する「個」の存在を前提とする。そこでの「個」の際立ち、当然の帰結といえる。一方、「出来事」中心の表現は、「個」の埋没と表裏一体の関係にある。2つの表現タイプの相違は、次の指摘とも連動している。鈴木（1973）は、人称代名詞を手掛かりにして、英語における「絶対的自己規定」と日本語における「相対的自己規定」について論じている。「行為」が「個」によって引き起こされ、また別

の「個」に向けられるものならば、それらの「個」は既存の、自らが自らを規定できる性格のものとして扱われる。一方、「出来事」の中に埋没している「個」は、一定の役割を付与されながら、その相互の依存関係において初めて規定されるような存在として意識される。また、中島（1987）や大津（1993）は、英語の詩作の展開が「遠心性」を示すが、日本語のそれは「求心性」を示す傾向があると指摘している。「個」が絶対的に自己規定されているならば、そこを出発点として放射状に事態を認識し描写することができる。他方、「個」が相対的にしか自己規定できないならば、そこにはまず「個」を取り囲む事態が存在する必要がある。

「行為」は、事態における時間の推移に裏付けされた「動的」なプロセスの典型であり、一方「出来事」は、必ずしも時間に拘束されない、むしろすぐれて空間的に認識されるプロセスであると考えられる。これに連動して「行為」は、「時間的メトニミー」を容易に可能にする。英語においては、「行為」表現が多くの場合「結果」を含意し（池上 1981、1983）、「結果」への広範な構文拡張のネットワークを持つ（Goldberg 1995）。また、いわゆる「間接発話行為」においても「行為」から「結果」を推測させるパターンが強く認められる（児玉 1991）。それに対して日本語では、「行為」表現は必ずしも「結果」を含意せず、「結果」表現への構文拡張は制限されている。そして、「行為」から「結果」への間接発話行為も有効性を持ちにくい。「結果」を含むか含まないかの一例として、\*I helped her solve the problem, but she couldn't solve it に対する「私は彼女が問題を解くのを手伝ってやったけど、彼女は解けなかった」（池上 1983: 276）がある。また「結果」構文への拡張については、英語では Joe kicked Bob black and blue (Goldberg 1995: 88)、The joggers ran the pavement thin (鷺尾 1997: 63) など数多いが、日本語ではそれらのほとんどが単一の構文では表せないものである（?? 「太郎は次郎をあざだらけに蹴った」、「\*市民ランナー達は歩道を薄く走った」）。そして、間接発話についても、英語では Can you pass me the salt? といった依頼表現が能力としての「行為」からその実現としての「結果」への連

鎖に基づいて幅広く見られるが（児玉 1991: 91）、日本語ではそうではない（「お塩を取ることができますか」は依頼表現にはならない）。日本語におけるこれらの特徴は、「行為」を「出来事」として捉えることに起因する様々な顕現と考えられる。「出来事」としての「行為」は、いわばそれ自体で完結しており、その時間的帰結としての「結果」に連なっていく必然性を持たないからである。

翻って、自己完結した「出来事」が何らかの拡張を見せる場合、それは多分に静的で空間布置的に実現される。日本語における「二重主語文」は、そのような「空間的メトニミー」をふんだんに駆使した言語形式であるし、また「被害受身文」も、主語と述部の、時間的推移よりもむしろ事態布置的な関係に立脚した言語形式であると考えられる。いずれの場合も、主語である人または物が「出来事」に関係付けられるプロセスである。二重主語文の「象は鼻が長い」、「太郎は髪が茶色い」では、「象」と「鼻が長い」、「太郎」と「髪が茶色い」がそれぞれ空間的な近接性に基いているし、被害受身文の「僕は昨日太郎に一日中家にいられた」などは、時間的推移（「太郎が家にいる」状況が「僕」に降り掛かる）ではなく、空間的布置（「太郎が家にいる」状況に「僕」が配置されている）によると考えられるのである。他方、二重主語文や被害受身文は、ヨーロッパ諸語において広く与格構文と機能的類似性を持つ。しかし、ヨーロッパ諸語の与格構文が時間的推移と密接に関わっていることは、次のドイツ語やポーランド語における対比からもわかる：*Ihm sind die Haare ausgefallen*（彼は髪の毛が抜けた）vs. *\*Ihm sind die Haare nicht mehr da*（彼は髪の毛がもうない）、*Dziecko mi zachorowalo*（私は子供が病気になった）vs. *\*Dziecko mi chore*（私は子供が病気だ）。時間の流れにおける「結果」と時間の流れを断ち切った「状態」に関して言えば、ヨーロッパ諸語の与格は前者と結びついても、後者とは結びつきにくい。日本語の二重主語文には、上の翻訳が示すように、そのような制限はない<sup>9</sup>。加

<sup>9</sup> 日独語対照については Ogawa (1997) を参照。

えて、「間接発話行為」に関しても、日本語ではやはり「空間的メトニミー」が優勢であるように思われる。例えば何かを欲する時に、そのものあるいはそれに関連するものの存在を尋ねるストラテジーが多用されるが（タバコが欲しい時の「タバコありますか」、また、タバコを吸いたい時の「灰皿ありますか」など）、これも「行為」とその「実現」、あるいは「原因」と「結果」という時間的推移とは無縁であると考えられる（金田一 1998、小泉 1990 参照）。

「空間的メトニミー」における因果関係は、「時間的メトニミー」におけるよりもそれ自体で明確ではない。日本語に「被害受身文」があり、それがまさしく「被害」を表すのは、「空間的メトニミー」に基づいた、希薄な因果関係を緊密にする意味作用と考えられる<sup>10</sup>。英語などにおいて厳密に裁断されている「態」と「モダリティ」が日本語において一つの形式に同居しているのである。「被害・受身文」の他にも、「あの人は息子を戦争で死なせた」のような「責任・使役文」が挙げられる。そこでは、「時間的メトニミー」は遵守されていない。そして、時間的因果関係を欠くにもかかわらず、それらの表現が成立するのは、まさにそれと連動して広義のモーダル（心情的）な意味作用（被害や責任）が生じるためと考えられる。翻って、モーダルな特性は一般に、それが話し手に関わることなのか、それとも聞き手や第三者に関わることなのかの決定を予め前提としている。世界の言語の分類にあたって、日本語が *no agreement pro-drop language* (Huang 1984)、つまり「動詞が人称変化を示さない上に、代名詞主語が義務的でない言語」であることは、この事情と密接に関係していると思われる<sup>11</sup>。

<sup>10</sup> この意味作用を久野（1983）は「意味の補給」であり、Shibatani（1994）は「述語の外から決定される（extra-thematic）」としている。

<sup>11</sup> 被害受身文に加えて、広義の心理・生理表現における文末形式（「悲しい」、「悲しいよね」、「悲しそうだ」など）、ダイクシス表現（「あげる」、「くれる」など）、敬語体系（尊敬語、謙譲語）などにより主語人称が一義化することを考慮すれば、日本語は純粋な *no agreement pro-drop language* とは言えない。なお、*no agreement no pro-drop language*（例えばかなりの程度で現代英語）、*agreement no pro-drop language*（例えばドイツ語）、*agreement pro-drop language*（例え

この他にも、「時間的メトニミー」と「空間的メトニミー」の対立は、様々な言語レベルで見い出すことができる。例えば語彙レベルでは、動詞の選択制限 (selectional restriction) がある。同一の動詞がいわゆる被動目的語 (affected object) と結果目的語 (effected object) の両方を許すか否かを見ると、日本語では強い制限が働いているのに対して、英語などでは広範に許容されている (Plank 1984, Hawkins 1986 参照)。具体的には、to burn the dress (服を焦がす) vs. to burn a hole (\* (服などにタバコなどで) 穴を焦がす)、Kupfer gießen (銅を注ぐ) vs. eine Glocke gießen (\* 鐘を注ぐ) など多数ある。日本語でも「米を炊く」／「ごはんを炊く」、「地面を掘る」／「穴を掘る」などが可能であるが、ここではきわめて緊密なメトニミー関係が前提となっている。「米を炊く」、「地面を掘る」ことが「ごはんを炊く」、「穴を掘る」ことを強く含意しているのに対して、「服を焦がす」、「銅を注ぐ」ことは「服を焦がして穴を作る」、「銅を注いで鐘を作る」ことの単なる前段階に過ぎない<sup>12</sup>。これに対して、時間とは無関係に存在するメトニミーは、英語よりも日本語の方が緩やかなように思われる。それは、部分で全体を(「手が足りない」、容器で中身を(「今日は鍋にしよう」、もの自体でものの在り方を(「足が速い」、それぞれ表す場合である(池上 1975、瀬戸 1997)。このような空間的メトニミーの代表格は、先の二重主語構文もさることながら、いわゆるコピュラ文一般であると考えられる。それは、「同定」や「属性」から敷衍された、単に近接的な関係付けだけで成立可能なのである(食事の注文における「僕はウナギだ」、自分の子供が男か女か尋ねられて「僕は女だ」など)。以上に関連して、言語習得のレベルにおいても、日本語ではいわゆる条件節が英語など他言語と比べて早期に習得される(およそ2歳頃)という興味深い事実がある(赤塚 1998)。英語など他言語では日本語と違い、並列接続文や原因節の獲得が先行するという。これらが概し

---

ばイタリア語)では、いずれも主語人称の同定が体系的に保証されている。

<sup>12</sup> このような目的語の選択制限とその他の文法的諸特徴との連動性については、稿を改めたい。

て時間軸に沿って2つの事態を結び付ける言語手段であるのに対して、条件節は2つの（時間的には必ずしも関係のない）事態を空間的に配置する方略といえる。この他にも、言語行動レベルにおいて、日本語のあいさつ表現では「現在確認型」（中野 1982: 58）が、英語のそれでは「未来志向型」がそれぞれ主流である点が挙げられる。例えば、英語の Good evening! が（本来 I wish you a good evening であるから当然）別れのあいさつとしても用いられたり、日本語の「おかえり」に相当する英語の表現がないことなどが示唆的である。ここでも、時間の推移を意識した表現と時間的に固定し、空間的メトミニーに立脚した表現との違いが見られる。

前述の「個の際立ち」と「個の埋没」に戻ると、それは名詞の在り方にも相違をもたらすことになる。英語において「単数」と「複数」、また「定」と「不定」が明確に区別されねばならないのもその一つであろう。周知のように、日本語ではこれらの区別は義務的でないし、区別できる場合でも事情はかなり異なっている。水口（1998）は、英語との違いで日本語の複数形態素「たち」が「連想としての複数 associative」をも意味できることを指摘している。英語の the Yamadas が原則として「山田さん一家」しか表せないのに対して、「山田さんたち」は「山田さんと同僚、友だち、敵、その場に居合わせた人たち」なども指示することができる。The Yamadas つまり「山田さん一家」がその内在的特性から絶対的に規定されるのに対して、「山田さんたち」は状況に即して相対的にしか規定できないと考えられる。これは、先の人称代名詞における「絶対的自己規定」と「相対的自己規定」の対立にも通じるし、また、日本語で支配的な「空間的メトミニー」が可能になっている一例とも見なせる。と同時に、ここにも「個」の自立性（際立ち）と依存性（埋没）の相違が見て取れるのである。他方、モノとしての「個」の際立ちはコトとしての「出来事」の際立ちとして隠喩的に理解され（大堀 1992: 40）、英語においてそれは「完了」と「未完了」の区別として顕在化する。ここでも、ふたたび時間の推移が基礎となっている。これに対して日本語では、「出来事」はそれ自体ですでに「完了」しており、それが「未完

了」と二項対立する図式は意味をなさない。「完了」した「行為」であろうが、「未完了」の「行為」であろうが、それは同列に扱われるべき「出来事」として成立できる。日本語において、終助詞「た」が現在の「完了」と「未完了」の過去を、また文末形式「ている」が「完了」した結果状態と「未完了」の行為進行を、それぞれ表せるのは示唆的である<sup>13</sup>。

以上を含めてさらに多くの差異を見るならば、それらが個別言語内において相互の連動性によって生じた所産の集積であることは十分に予想される<sup>14</sup>。このような観察を通じて、言語と文化の関係のパラメータ化の可能性が開けるとと思われる。それは、たとえそこからこぼれ落ちる側面を犠牲にしたとしても、魅力的な課題である。

個別文化を通底する個別言語の間の差異は、しかし、本来異質なものの対立ではなく、共通の認知的基盤における別の顕現の仕方であると思われる。しかもそれは、相互に乗り入れが可能な性質のものであると予想される。先の「個」の際立ちが「出来事」の際立ちとして隠喩的に理解されるというのはその一例である。ラネカー（1987）は、対象をいかに、つまり「物体」として、「人物」として、あるいは「関係」としてプロフィール（輪郭化）するかにより、品詞の区別がなされることを主張しているが、これはそもそもそのようにプロフィールできる人間の認知的基盤を前提としている。英語において絶対的な「人」が「行為」する事態を日本語で相対的な「関係」から成る「出来事」で捉えたとしても、両者は共通の認知的基盤からのいわば派生であると考えられる。また、近年の歴史的・類型論的言語研究では、「文

<sup>13</sup> 日本語でも、結果状態と行為進行を別の形式によって表わす方言がある。例えば関西から中国・四国地方一円にかけて、「来とる」と「来よる」で区別する地域がある。これは一方で、結果状態と行為進行の区別が認識において有意味なことを示している。

<sup>14</sup> 以上述べたような差異は、言語そのものだけでなく、言語研究の在り方にまで現れているように思われる。そこにも、言語的土壌や文化的背景が色濃く反映している。例えば、アメリカを中心にして近年隆盛の「認知言語学」における「action chain」(Langacker 1990)や「causal order」(Croft 1991)などは、その名称からも推察できるように、時間的推移を基盤にした説明モデルであると言える。



法化 grammaticalization」のメカニズムの解明に注目が集まっているが、そこで繰り返し観察されるのは、「個」を前提とする「行為」、「移動」、「位置づけ」、「付随」、「同定」、「所有」、「状態変化」、「意志」などが、「出来事」にしか関連付けられない「起動」、「進行」、「継続」、「完了」、「結果」、「過去」、「未来」などに機能変化している数多くの事例である (Heine 1993, Hopper and Traugott 1993)。端的な例は、本来空間的な意味を持つ前置詞が時間的な意味に転用される場合に見られる。言語変遷におけるこういった「駆流 drift」(Sapir 1921) が広く通言語的に認められるとすれば、それが偶然であるとは考えられない。同様に、空間と時間の間のメタファーが人間言語が駆使できる典型的なそれであるならば (Hopper and Traugott 1993: pp.78)、先に論じた「空間的メトニミー」と「時間的メトニミー」も、やはり人間の認知活動における共通基盤を出所していると予想されるのである。この共通基盤の在り方については、また稿を改めて論じたいと思う。

## 5. おわりに

文化の差異を映し出している (と思われる) ことばの差異が、否応なく人間に共通する認知的基盤に収斂していくとすれば、その在り方はまたしても「それ自体で完結した有機体としての言語」レベル、さらには「遺伝的に組み込まれた生得的プログラムとしての言語」レベルにフィードバックされていく必要がある。個別言語を音声、形態、語彙、文、発話、コンテキストなどにおいて構成している諸要素間の関連性が問題になるからである。それは、部分から全体を再構築できたり、また一つのパラメータから他のパラメータを予測できたりすることを意味する。そしていずれのレベルにも共通している点は、個別言語がその内部の諸特徴が連動し合って、ある一定の類型に形作られていくとする前提である。このようにして形作られ、結果として生じた複数の個別言語が一見かなりかけ離れた様相を呈していても不思議ではない。

言語相対性をめぐる議論において、ウォーフの主張に対する有名な反論が



ある。それは、ウォーフが言語が異なれば事態の捉え方、ひいては思考様式も異なるとする見解を述べながら、英語を母国語とする者として北米インディアン諸語に属するホープ語を十分理解し分析できるというのは矛盾している、といった趣旨である。この反論は、しかし、人間言語に共通する認知的基盤を認め、個別言語間に顕現しているオプションと潜在しているそれを相対化できる立場からすれば、十分に再反論されるべきであろう。個別言語の生得的、機能的そして文化的特徴までが人間の言語に本来折り込まれたオプションの一部の現れに過ぎないとすれば、他の潜在しているはずのオプションを導出、活性化することで、異言語や異文化の理解も可能になると考えられるからである。

\*本稿は、神戸大学国際文化学部および神戸大学大学院総合人間科学研究科における講義や演習を通じて学生諸君との議論の中から得たものを私なりにまとめ、これまでの私自身に関心あるテーマとも合わせて研究の筋道を示そうとした試みである。その成否はともかくとして、多種多形、刺激的で示唆に富み、時には鋭く批判的な意見を述べてくれた学生諸君にここで感謝したい。また、本論文の原稿の査読者からは貴重なコメントを数多く頂いた。今回は分量的また時間的な制約もあり、それを十分に活かし切れなかった。次回にお答えしたいと思う。

#### 参考文献

- 赤塚紀子 (1998) : 『モダリティと発話行為』 (坪内篤朗と共著) 研究社  
Croft, W. (1991): *Syntactic categories and grammatical relations. The cognitive organization of information.* Chicago: The University of Chicago Press.  
Gabelentz, G. v. d. (1891): *Die Sprachwissenschaft, ihre Aufgaben, Methoden und bisherigen Ergebnisse.* Tübingen: Gunter Narr (Reprint).  
Goldberg, A. E. (1995): *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure.* Chicago: The University of Chicago Press.  
Greenberg, J. (1974): *Language Typology: A Historical and Analytic Overview.* The

- Hauge: Mouton.
- Hawkins, J. A. (1986): *A Comparative Typology of English and German. Unifying the Contrasts*. London and Sydney: Croom Helm.
- Heine, B. (1993): *Auxiliaries. Cognitive Forces and Grammaticalization*. Oxford: Oxford University Press.
- Hopper, P. J. and Traugott, W. C. (1993): *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huang, C.-T. J. (1984): On the Distribution and Reference of Empty Pronoun. In: *Linguistic Inquiry* 15/4, pp.531-574.
- 池上嘉彦 (1975) : 『意味論』 大修館書店
- 池上嘉彦 (1981) : 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』 大修館書店
- 池上嘉彦 (1983) : 『詩学と文化記号論—言語学からのパースペクティヴ』 筑摩書房
- Keenan, E. L. (1976): Towards a Universal Definition of subject. In: Li, C. N. (ed.) *Subject and Topic*. New York etc.: Academy Press. pp.303-333.
- 児玉徳美 (1991) : 『言語のしくみ—意味と形の統合』 大修館書店
- 小泉 保 (1990) : 『言外の言語学—日本語語用論』 三省堂
- König, E. (ed.) (1995-): *Empirical Approaches to Language Typology: EURO TYP*. Berlin/ New York: de Gruyter.
- 金田一春彦 (1988) : 『日本語新版 (下)』 岩波書店
- 久野 暲 (1978) : 『談話の文法』 大修館書店
- 久野 暲 (1983) : 『新日本文法研究』 大修館書店
- Lakoff, G. (1987): *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press. (池上嘉彦他訳 『認知意味論—言語から見た人間の心』 紀伊国屋書店)
- Langacker, R. W. (1987): *Foundations of Cognitive Grammar. Vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1990): *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin/New York: de Gruyter.
- Mizuguchi, Sh. (1998): *Semantics of "Tachi". A Formal Approach to Japanese 'Plurals'*. In: *Studia Universitatis Babeş-Bolyai Philologia* 4. pp.29-46.
- 中島文雄 (1987) : 『日本語の構造—英語との対比』 岩波書店
- 中野道雄 (1982) : 発想と表現の比較. 『日英語比較講座』 第4巻 『発想と表現』 pp. 33-65. 大修館書店
- Ogawa, A. (1997): *Argumenterhöhung im Sprachvergleich. Dativ im Deutschen vs. Postposition -ni, Multiple-Subjekt und Adversativ-Passiv im Japanischen*. In: *Sprachwissenschaft* 22. pp.181-206.
- 小川暁夫 (2000) : 機能類型論と認知言語学—ドイツ語研究の観点から. 日本独文学会

- 『ドイツ文学』104号. pp.90-101.
- Ogawa, A. (2000): Analytisches und synthetisches System in der Kasustypologie. In: Ezawa, K. /Kürschner, W. / Rensch, K. H. / Ringmacher, M. (eds.) *Linguistik jenseits des Strukturalismus. Akten des 2. Ost-West-Kolloquiums für Sprachwissenschaft*. Tübingen: Gunter Narr.
- Ogino, K. (1997): Mir ist we und bin gesund. Subjekt- und Topikprominenz im Mittelhochdeutschen. In: Hayakawa, T. / Sengoku, T. / Kimura, N. / Hirao, H. (eds.) *Sprache, Literatur und Kommunikation im kulturellen Wandel. Festschrift für Eijiro Iwasaki anlässlich seines 75. Geburtstags*. 同学社 pp.201-215.
- 大堀俊夫 (1992) : イメージの言語学—ことばの構成原理をもとめて. 月刊『言語』 Vol.21. No.12. pp.34-41.
- 大津栄一郎 (1993) : 『英語の感覚 (上)』 岩波書店
- Plank, F. (1984): Verbs and objects in semantic agreement: Minor differences between English and German that might suggest a major one. In: *Journal of Semantics* 3. pp.305-360.
- Sapir, E. (1921): *Language: An Introduction to the Study of Speech*. New York: Harcourt, Brace & Co. (泉井久之助訳『言語—ことばの研究』 紀伊国屋書店)
- 瀬戸賢一 (1997) : 『文化と発想とレトリック』 (巻下吉夫と共著) 研究社
- 柴谷方良 (1985) : 主語プロトタイプ論. 『日本語学』 Vol. 4. pp.4-16.
- Shibatani, M. (1994): An integrational approach to possessor raising, ethical datives, and adversative passives. In: *Berkeley Linguistic Society* 20. pp.461-486.
- 鈴木孝夫 (1973) : 『ことばと文化』 岩波書店
- 宇津木成介 (2000) : 差異から始まる文化論試論. 神戸大学国際文化学会『国際文化学』2号. pp.1-17.
- 鷲尾龍一 (1997) : 『ヴォイスとアスペクト』 (三原健一と共著) 研究社
- Weisgerber, L. (1929): *Muttersprache und Geistesbildung*. Göttingen. (福本喜之助訳『母国語と精神形成』 講談社)
- Whorf, B. L. (1956): Carroll, J. B. (ed.) *Language, Thought and Reality: Selected Writings of Benjamin Lee Whorf*. Cambridge, Mass.: MIT Press. (池上嘉彦訳『言語・思考・現実』 講談社)

小 川 暁 夫

**Abstract**

How do (differences of) languages mirror (differences of) cultures?

Akio OGAWA

In this article I will engage myself with some kinds of relationship between language and culture. Chapter 1 suggests two key words: discovery of differences (individuals) and recognition of commonnesses (universals). Chapter 2 argues that language differences must be discussed beyond the boundaries of geographical areas, language families, dialects etc. In this way it must be focused on the discovery of language universals. Chapter 3 shows three levels on which a language is regarded as integrated unit: language as a genetically innate system of human beings, language as a functional organism of which parts are dependent on each other, and language as a mirror of cultural background and way of thinking based on each culture. These three levels are illustrated by means of how to characterize the passive construction. Furthermore, it is argued that they do not exclude each other, but form interfaces to each other, which should be extended to interior disciplines such as genetics, brain neurology and psychology and to exterior disciplines such as anthropology, sociology and literature in its wide sense. Chapter 4 focuses on a number of cultural aspects which are (or seems to be) mirrored in languages. Language comparison enables to find out that many aspects of one language are consistently penetrated through a subset of construal notions. The spatial notion, for example, determines categorizations in syntax, semantics, pragmatics as well as language acquisition and behavior more or less uniformly in some languages, while the temporal notion does this in other languages. Both notions, however, are assumed to originate from common cognitive fundamentals of human beings. So chapter 5 comes to the conclusion that the language relativism itself must be relativized. The antithesis that language relativists such as Whorf could not claim for differences of language and thought, because they could not understand them, must accordingly be revised.